

い発表に辛抱強くお付き合い頂いた。とりわけ、お二方からは、中国古典文学研究の視点から、さまざまなご指導やご助言、ご示唆を頂いたことは感謝してもし尽くせぬほどである。時には中国や台湾からの留学生も私のこの演習に席を同じくしたこともある。西岡先生が、信州大学に転出される折、私に残して頂いたお言葉に、「君は地道にやる精神力が、最大の長所だから、今後も焦らずに研究を続けなさい。そうすればいつか開花できるから。」といった主旨のものがあつた。私はその後、自分の力の無さを思い知る毎に、いつもこの言葉を支えに諦めずに今こうして、わずかに形として残せるようなものにとどりつけたような気がする。

こうした熊本大学大学院で学んだ三年間は、師に恵まれた、その後の自分自身の糧となり得るものを醸成するに不可欠な貴重な時間であつた。

そして、院終了後、福岡県立高校の国語教諭として勤め始める。そんな時、熊本大学の文学部の主任教授であられた荒木尚先生より、有明高専の専任の空きがあることをお知らせ頂いた。当時、私は教育者のはしくれとして多忙ながらも充実した日々を送っていた。が、その一方で研究に対して、捨て難い思いを抱いていたのも事実である。この心情を荒木先生は察して頂き、私に有明高専のポストを薦めて頂いたものと、そのご配慮に心より感謝申し上げたい。

有明高専に赴任してから今日まで二十七年間本当に多くの方々に支えられ、励まされながらの勤めを続けてこられた。研究の方は校務が、年を追う毎に煩雑さを増し、それをこなすだけで精一杯で、何度も挫折しそうになつた。とりわけ、日中は、学生の教科指導や担任業務等の学生指導に追われ、学生が帰宅する夜の時間が、唯一研究に専念できる時であつた。高専では放課後の部活動が盛んでその指導に、多くの教員が夜七時を過ぎるまで学生と行動を共にし、土・日は試合等の引率に出掛ける。私は長年剣道部の顧問の一人に名を連ねておりながら、